

インタビュー

鑄物人

i mo jin

このコーナーでは、鑄造界で活躍する人々に登場してもらい、鑄物とのかかわりやそのほかさまざまなお話しをしていただきます。今回は鑄物の街・川口から、今年創業70年を迎えた(株)田口型範社長、田口順さんにお話をうかがいました。

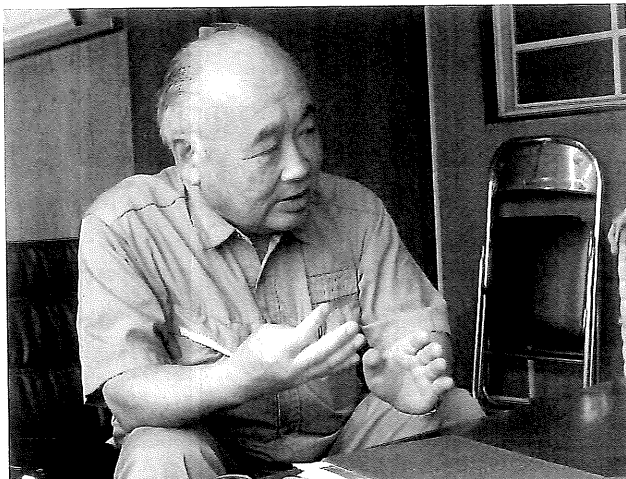
インタビュー：(日産自動車(株)) 神戸洋史
事務局 鈴木理恵



Q お父様が創業された会社ということで、やはり子供のころから将来は継ごうと思っていたのですか。

A いや、それは全く思っていなかったんですよ。私には兄がいて、父からは「兄弟で継がせることはしない」と言われていましたから、どちらかが継ぐのならまずは兄だろうと、兄は東工大で機械工学を学んでいましたので、私は医者になりたいとか、航空工学をやりたいとか思っていましたね。高校3年生の時に東大を受けたのですがダメで、浪人した翌年はちょうど安田講堂事件があって東大の入試がなくなってしまったんです。それで京大の航空工学を受験しようかとも思ったのですが、なんとなく早稲田の金属を受けていました。なんだかんだ言っても、やはり父親の影響はあったのだと思います。早稲田の鑄物研究所は鑄物の関係者が大勢いましたので、学生時代にすでにたくさんの人脈を築くことができ、それで安心したのか、兄は自分には違う仕事が合うと田口型範を辞め、結局は私が継ぐことになりました。

創業者の父は、木型屋で丁稚奉公からたたき上げた木型職人でした。尋常小学校を卒業して、本当は川口の機械加工の工場に行く予定が、紹介状を持って先方を待っている



- 氏名： 田口 順さん (68歳)
- 出身地： 埼玉県
- 略歴： 1973年3月、早稲田大学理工学部金属工学科卒。同4月(株)田口型範入社。85年同社専務、89年社長、現在に至る。

間に木型屋の社長に見初められ、そのまま丁稚奉公に入ることになったというのだから、当時はすごい時代ですね。そうして18歳の頃にはトラックや戦車のエンジンの木型を作れるようになったのですから、腕も良かったのだと思います。その後戦争で召集され、帰ってきてからお礼奉公した後で独立した時も、社長はもっとも大きな仕事を父にくれました。そして今から70年前、同市内の住工一体の工場で木型屋を始め、手狭になって7年後に使われなくなった芝居小屋に移りました。

Q 子供のころからお仕事を見てこられたと思いますが、今と昔とでは、技術もずいぶん変わったのではないですか。

A だいぶ変わりました。今はCAD/CAMの時代ですから、設計図が手書きの平面だった時代は、図面から立体の形状を想像し、書かれていない部分は設計者の意図を推し量りながら木型を起こしていました。でも今はそんな必要はなくなりましたね。作業も今ではほとんど機械です。それはすごい進歩なのですが、同時に、本当の木型づくりの面白さというのも味わえない時代になってきたなという印象はあります。毎年行われている木型の技能検定も、今年でついに最後になってしまいました。もう、ノミやカンナで木型を作る時代じゃないですから、なかなか同じ条件で検定というのも難しいんですよ。

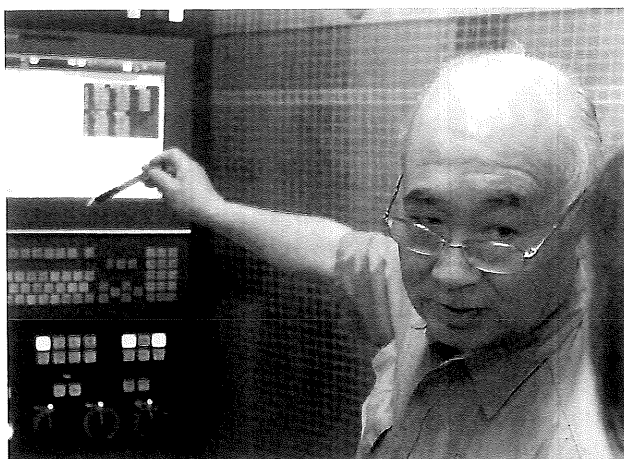
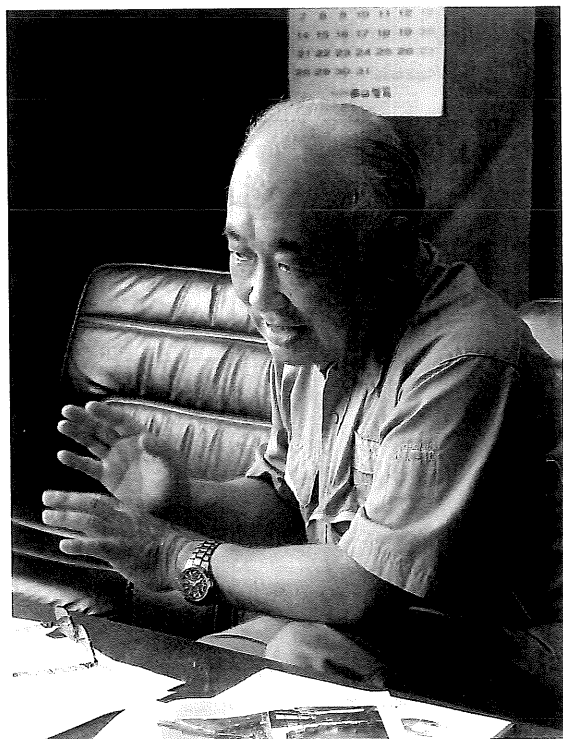
しかし、コンピュータの時代になってもやはり、超難易

度の鋳造品の型を作るとなると、経験がものを言います。ほかの型屋や鋳物屋では作ったことがないような難しいものが一発でできたときは本当に気持ちがいいですね。鋳物はデリケートですから、木型も、鋳物屋の環境によって一つひとつ変えなければなりません。そこを見極め、一発で形にするというのは至難の業です。お客様が私たちを信頼して、ほかではできないような難しい仕事を持ち込んでくれるのも、とても誇らしく、嬉しい気持ちになります。

Q 今年で創業70周年、ここから100年企業を目指していくということですが、この先、どのようなことをやっていくつもりでしょうか。

A この5月に創業70周年を迎え、これまではおかげさまで非常に順調です。しかし今は自動車のエンジン関連が大部分を占めていて、これからの30年を見据えた時、自動車エンジンの需要がどうなるだろうかというのは一番考えますね。新たな動力の自動車が登場してきている今、エンジンに頼り切った仕事では、なかなか乗り切っていけないと思います。また一方で少子化も深刻です。地元の工業高校の卒業生もなかなか採用できない時代になってきました。私の時代はまだいいのですが、この先、息子や、さらにその次の世代になったときには時代はもっと変わり、どうなっていくかわからない部分があります。でも、それでもずっと何かを作り続けていく会社であってほしいと思いますね。日本という国は製造業が支えていると思うんですよ。私は仕事やプライベートでよく海外へ行きますが、例えばバーミンガムなど、産業が根付いている町は、浮足立っていないで落ち着いていて、とてもいいと思います。日本もやはり、そうあってほしいですね。

Q では、若い人たちへのメッセージをお願いします。



A 先代の好きな言葉に「一人前」というのがあります。「間違えないこと」「正確に作ること」「決められた時間内にできること」の3つの条件が揃って初めて「一人前」になる、というのです。これは確かにすごいことです。しかし、最初から失敗をしないようにしようとしても、それはそれでだめなんです。機械を壊すようなことがあっては困るのだけど(笑)、理論や条件は守りつつも、好きなように存分にやってみて、失敗を恐れないでほしいと思います。

鋳物屋って、日本人に合っている仕事だと思うのです。海外を見ていると「俺はこの担当だからほかは知らない」という仕事をしているところも多いのです。でも日本の場合は、前後に気を使い、前の工程で悪い部分があっても自分の工程でそれを補いながら次へつなげていくような仕事のし方ができる。これはとても素晴らしいことです。お金だけでなく、責任感やプライドに価値を見出して仕事をするという気質が、日本の製造業にはあるんです。だからうんと誇りを持ってやっていきたいと思っていますね。

田口さんに5つの質問！

1. 好きな言葉は？
温故知新。
2. 趣味は？
テニス（ゴルフは現在休み）。
3. 特技は？
なんでも吸収でき、バランス感覚が良い。
4. 自分の性格を一言でいうと？
誠実。
5. 日課にしていることは？
週課として、毎週月曜は休肝日。